

説教題：「**神の国を待つ日々**」

聖書箇所：イザヤ書56章6-7節（1154頁）、ルカによる福音書19章11-27節（146頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93-1-26 交読詩編：詩編103編14-22節（112頁）

讚美歌：83/425（こすずめも、くじらも）/436（十字架の血に）/81（主の食卓を囲み）/27

「今週の聖句」〔…イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。〕（ルカ伝19：11）

「牧師室の窓」 「教会の入り口塞（ふさ）ぐ雪撥（は）ねて礼拝前の作業は進む」

「北国の礼拝前のストーブも雪撥（は）ねも終え静かに座る」

(1)皆様おはようございます。ここ数日間、大雪降りが報道されています。事故が起きない事を、天候の回復を祈ります。各地の教会では、今日の主日礼拝を行なうのに教会員が共に協力して準備している所もあると思います。私が若年時に過ごした北海道では1年間の3～4か月間は雪のある日々でした。礼拝の前に、ストーブに火を起し、雪かきをして準備をすることが不可欠です。準備を整えることは共に祈ること生きることの基盤であり、準備の大切さを学びました。きょうの聖書箇所は「神の国」が来るまでの期間をどの様に待ち望むのか、準備するのかについてイエス・キリストが人々に分かり易く語っておられます。きょうの聖書箇所19章の手前の17章、18章を思い出してみましょう。神の国が既に来ていること、子供のように素直であらねばならないこと、財産が心の妨げになっていること、などなどが書かれています。19章の始めでは、イエス様を心の底から迎え入れたザアカイに対して〔(19:9)今日(きょう)救いがこの家を訪れた〕と言われました。17章18章19章に亘って、イエス様は「神の国」とは何か、「救い」とは何かを具体的に人々に示され続けておられるのです。併し、人々はそのことに気が付いてはいないのです。

(2)きょうの聖書箇所は11節から始まります。〔(19:11)人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。〕この11節のポイントは2つあります。

1つ目は「エルサレムに近づいておられ」、2つ目は「人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていた」です。

イエス様はガリラヤから百数十kmを歩いて、エルサレムの手前のエリコの町まで来られたのです。イエス様には神から託されたことがあります。それは「神の国」の実現です。言葉を変えて言えば、「神の愛」が人々に注がれることです。先程司式者が朗読して頂きました旧約聖書のイザヤ書56章6節7節には、神の愛が「主のもとに集って来た異邦人」にも注がれることがイザヤによって(正確には、第3イザヤと考えられる預言者によって)「預言」されています。ここに書かれているのは主の民として認められるのは「民族や国籍」ではなく、「わたしの契約を固く守るなら」と書かれています。約束を守ることによって「主の民となる」、言葉を変えて言えば「神の国に招かれる」のです。私たちのこの日本でも、人々は2つに区分することができます。

1つは「約束を守ろうと努力する人たち」であり、もう1つは「約束を守らない人たち」です。約束を守ることによって最善の努力を払う人々には国境はありません。人種の違いはなく、共に手を携えて生きるのです。イザヤ書の中で最も優れた考えの1つがこの箇所です。

7節の終わりに「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」と書かれています。この言葉を別の言葉で言えば、イザヤ書54章10節に書かれている「平和の契約が揺らぐことはない…主は言われる」であると私は思います。キリスト教の本質がここにあります。直近の国際政治状況では、関税（貿易の関税）設置や税率引き上げが行なわれつつあります。関税の設置は政治経済

学では「近隣窮乏化政策」、相手の首を絞めることは、結局は自国の首を絞めることになります。国際経済学や国際貿易論には「ヘクシャー＝オリーンの定理」と言う法則があり、互いに経済的な長所を認め合って貿易を行えば双方が繁栄するのです。ここに人類共存の知恵があります。貿易戦争などではいられないのです。何の資源もない日本では知恵と工夫とで付加価値を創造し、諸外国との貿易によってこそ生きることができると言えます。日本の指導者は外国の指導者に対して、平和とは何か、貿易とは何かをしっかりと共有して欲しいと私は思います。日本基督教団も東京教区も北支区も、平和の実現のためのプログラムを、行動計画を実行していただきたいです。「計画⇒実行⇒点検⇒改善実行（問題の発見・共有⇒計画⇒データ集積⇒分析⇒行動）」物ではなくても、祈りが、熱意と情熱が、解決への入り口となります。

(3)話を進めます。今日の聖書箇所ルカによる福音書19章12節13節です。〔(19:12)イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。(19:13)そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をきなさい』と言った。〕ある人が「遠い国へ旅立つこと」になりました。その理由は「王の位を受けて帰るため」です、と書かれています。イエス様はユダヤ当局からの十字架の処刑により、神のもとへ昇られ、神の御子として人々を救われることが示されています。今日の主人公は「十人の僕を呼んで」留守中の宿題を出します。「十ムナの金を渡し…これで商売をきなさい」と命じたのです。1人当たり「1ムナ」です。聖書の巻末に「度量衡・通貨」の換算表があり、ムナとは、ギリシアの銀貨で100日の賃金に相当すると書かれています。おおよそ百万円あるいは百五十万円と考えられます。並行記事のマタイによる福音書25章ではもっと大きな金額として書かれています。マタイ伝のお金の単位であるギリシア語のタラントは、英語では才能・手腕という意味であり、日本語では、タレント・芸能人という意味で使われています。…私の独り言ですが、テレビ放送では芸能人・タレントを活用し多彩な宣伝広告を流しています。膨大なお金が使われており、お金が人間を支配している様に思えます。私の思いは、金銭・お金を使って人間を支配してはならないということです。お金を使って、人々の生活を豊かにし、病気を防ぎ、社会資本を充実する、それがお金の役割なのです。「これで商売をきなさい」とは、「あなたの人生に役立てなさい」と言うことに他なりません。

(4)本日のルカ伝の14節には、イエス様のことをよく思わない人々が、これから向かおうとしているエルサレムの町に多くいることを記しています。のちに、初代教会が形成される頃に弟子たちはイエス様がお話しされた譬え話のことを思い出していることがここに現れています。15節以降には、主人公が「王の位を受けて帰」えり「金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを」尋ねている場面が記されています。10人の僕(しもべ)の一人は与えられた1ムナのお金で10ムナへと利益を上げ、或る者は5ムナへと利益を上げたのです。褒められて褒美を与えられました。褒められたその訳・理由が17節にあります。〔(19:17)…良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから…〕と書かれています。この「ごく小さな事に忠実」とはどういう意味でしょうか。それは「自分の役割を理解する」「自分の仕事を愛する」「自分の為すべきことを行なう」と言うことではないでしょうか。短縮して言えば「理解する・愛する・実践する」ことです。もっと短縮して言えば、「その人なりに精一杯に生きる」と言って良いと思います。私たちは、主から託されたこの命をこの人生を、私たちなりに「精一杯に生きる」ことが求められているのです。置かれている状態や環境やハンディーキャップに拘わらず、「精一杯に生きる」ことが許されているのです。つまり、「自由が与えられている」のです。この自由を無駄にしてはならないと私は思います。…私はある会社で働いている時に、社員みんなに「自分の仕事を愛する」ことをお願いしました。そのことが会社の利益を生み出し、社員の収入が増え

ることになるのです。この会社が社会の役に立つことになるのです。私も懸命に働くことができました。

(5)次に20節を見てみましょう。〔(19:20)また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。(19:21)あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』〕この人は自分なりの判断力を持っていましたが、自分の人生の日々を生かすことができませんでした。この僕(しもべ)に対して主人は言いました。23節です。〔(19:23)ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。〕この僕は一つの考えに固執して、心の自由を閉ざしていたと考えることができます。誰しもが陥る罠(わな)です。新約聖書のペトロの手紙Ⅰ 2章6節には次の様に書かれています。430頁です。〔(ペトロ前書2:16)自由な人として生活しなさい。しかし、その自由を、悪事を覆い隠す手だてとせず、神の僕として行動しなさい。〕この23節からは2千年前のローマ帝国が支配しているユダヤも貨幣経済の社会であることが推測できます。現代社会と基本構造が似ていると考えられます。従って、新約聖書の場面場面が現代社会との相似形として読むことができます。序で乍ら、「利息付き」と書かれています。私たちのこの日本では約30年間利息はほぼない期間でしたが、漸く「金利のある世界」へと移行しつつあります。「金利」とは需要と供給によって決定されます。需要と供給は人々の活動によって作動します。また金利は「将来を見通す・予測する力」を養うのです。「金利のない世界」この30年間は人々の活動は弱く社会の発展は僅かであり、世界の動きから取り残されてきました。同じことが日本のキリストの教会にも言えることであり、この社会に対して御言葉を宣べ伝えることを怠ってきたと率直に認めても良いと思います。新約聖書テモテへの手紙Ⅱ 4章2節には(394頁)〔(テモテ後書4:2)御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くて悪くても励みなさい。とがめ、戒め、励ましなさい。忍耐強く、十分に教えるのです。〕いま、御言葉を宣べ伝える時が来ているのです。話しを元に戻しまして、私たちはキリストと共に生きる人生を与えられています。いつの日にか神の国に招かれる希望を、確信を与えられています。

神の国を待つ日々に「ごく小さな事に忠実」な人生を歩もうではありませんか。

・・・お祈りします。

主なるキリストの神様。私たちはいま1年で最も寒い時期を過ごしています。大雪が降り困っている地域が多くあります。何としてでもこの期間を乗り越えることができますようにお守りください。中東での戦争で困難な状態にある人々の生活が復興できますように、ウクライナでの3年も続く戦争が、地球上の各地での戦争が終結し、人々が生活できますようにお導きください。その為に働いている国際連合や様々な人々の働きをお守りくださいますように。私たちも出来ることをして参りたいと願っています。教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 **アーメン**

〔新共同訳(イザヤ書56:6)また、主のもとに集って来た異邦人が／主に仕え、主の名を愛し、その僕となり／安息日を守り、それを汚すことなく／わたしの契約を固く守るなら(56:7)わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き／わたしの祈りの家の喜びの祝いに／連なることを許す。彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら／わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。〕

〔新共同訳(ルカ伝19:11)人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っ

ていたからである。(19:12)イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。(19:13)そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。(19:14)しかし、国民は彼を憎んでいたのもので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。(19:15)さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。(19:16)最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナも受けました』と言った。(19:17)主人は言った、『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』(19:18)二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。(19:19)主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。(19:20)また、ほかの者が来て言った、『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。(19:21)あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』(19:22)主人は言った、『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。(19:23)ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』(19:24)そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』(19:25)僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っています』と言うと、(19:26)主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。(19:27)ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』」)